

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	西亀有三丁目保育園
施設所在地	東京都葛飾区西亀有3-31-9
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

作る

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

素材が少ないために取り合いになったり、ブロック類を作らずに集めて取っておく姿があった。また、使い方がわからず、大きな紙から小さな切り抜きをして捨ててしまう姿がある。自分の作りたいものを作り上げられる。何度も失敗や試行錯誤をして、自分の満足の行くものを作り上げる。また改良を重ねていく、作ることの探究を深めていく。

## 2. 活動スケジュール

【子どもの観察とスタッフの意思統一】

・活動の方針についてスタッフで子どもたちの様子を見て話し合いを行う。

【玩具・素材を購入する】

12月：ブロックの種類、数、子どもたちが作ることができる素材を購入

子どもたちは数が多くなった玩具等で使って遊びにチャレンジするようになり、新しい素材を使って制作を始めるようになる。

素材を増やすことで遊びのバリエーションが増え、また継続的に遊ぶようになる。

【作ったものを披露する】

1月：子どもたちの活動の様子やより遊びを広げる機会として、朝の会や夕方の会で作ったものを披露する。または共同で作っているものの仮定を披露する。

【作ったものにとっておける展示場を作る】

廊下の棚の上に置き、作り上げた喜びを感じるようにする。保護者にもその作品が見えるようにし、造形物についての会話のきっかけにする。

・友だちの作ったものを共有しお互いの刺激の場にする。

【新しい素材や量を追加する】

子どもの声や活動の様子から素材や数を増やす。製作物に関するものは年間を通して増やしていく。

【展覧会を実施する】

3月：自分たちの作ったものを廊下の棚を利用し、並べる。壁面に貼るなどし、クラスの枠を超えて皆で作品を見る機会を作る。

【活動の振り返り】

3月：振り返り来年につなげる

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

ぶっろく系の種類を増やす。子どもたちが自分のイメージを膨らませ作り上げる、友だちとちと協同して作り上げられるよう既存の物の数を増やす。

ブロック類：フラワーブロック、ソフトブロック、ニューブロック、マグフォーマー、スリープトイ  
素材：ひと穴あけパンチ、軽量紙粘土、画用紙各種、折り紙、麻ひも、升目模造紙、平ゴム、オーバード、ポスターカラー、ジャンボロール、タックラベル

表現遊びの中で作るに使用したもの：カラービニール袋、リボン、衣装づくり素材、おしゃべりなたまごやき(絵本)ハンガーラック(作ったものを下げたり、乾かすために使用)

収納ボックス ブロックを入れるために使用

### 4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【子どもの観察とスタッフの意思統一】

スタッフが子どもたちの様子を観察し、どんな活動を行うのか意見を出す。玩具や素材を増やし、自分の作りたいものをじっくり作り上げる環境を作る方針を確認した。

【作ったものを披露する】

子どもたちの活動の様子をドキュメンテーションの中で紹介する。廊下の棚の上に飾り、朝夕の保護者との会話のきっかけにし、子どもたちの活動の様子を知らせていく。また子どもが自分の作ったものを保護者に説明することで自分の活動を振り返る機会にした。近くで見たり、聞いたりしている子どもたちにとって刺激にもなり、自分もやってみようとのひとつのきっかけとなっている。朝の会や夕方の会で作ったものを披露し、お互いの作品を認める、またそれぞれのあそびを広げる機会となる。出来上がってなくても作っているものの仮定を披露することで遊びの継続につながる。友だちのしていることに興味を持ち、一緒にやってみたいと気持ちにもつながる。

【作ったものにとっておける展示場を作る】

廊下の棚の上に置き、作り上げた喜びを感じるようになる。保護者にもその作品が見えるようにし、造形物についての会話のきっかけとなった。

・友だちの作ったものを共有しお互いの刺激の場になり、苦手意識のあった子どもの作ってみようとのきっかけにもなっている。

【新しい素材や量を追加する】

子どもの声や活動の様子から素材や数を増やしていく。トラブルが少しずつ減り、安心して遊ぶ姿が増えてきた。素材が増えることで作るものの幅が広がった。また継続的に遊ぶこと、繰り返し遊ぶことが多くなった。

【展覧会を実施する】

自分たちの作ったものを廊下の棚を利用し、並べる。壁面になるなどし、クラスの枠を超えて皆で作品を見る機会を作り、造形活動、作って遊ぶことの広がりを皆で楽しめるようになる。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

最初はパーツや数が足りないため、自分のイメージに合ったものが欲しくて取り合いになること、使わないが取っておくことが多かった。担任が様子を観察し、よく遊んでいるもの、よくトラブルになるものを増やしていく。ブロックでは多量の物は入れ物を大きくし、子どもたちが取り出しやすく、使いたいパーツを探しやすいようにすることで落ちついて遊ぶようになる。同じようなものを作って「同じだね」と笑い合ったり、友だちの探しているものを見つけ手渡すことが増えてきた。自分の作ったものを見せ合い、「これはね」と自分のこだわりを伝えている。幼児クラスでは「ここにこうするといいんじゃない」とアドバイスする姿もあり、作品を通してイメージの共有、意見交換などの場面が見られる。時間では区切れない、まだ完成していないとの子どもたちの思いに対し、保育士が一方的に決めてしまわないよう、「どうしたら良いか」と問いかける中で子どもたちから意見が出る。時間で片付けなければだめだと意見もあったが、自分たちがどうしたいかという方向に向けていく。「〇〇出なければだめ」ということから、「〇〇したいから～する。そのために〇〇する」。そうしたやり取りを重ねる中で、今まで自分のしたことを言えなかった子どもが、絵本の中の乗り物に憧れ、段ボールを使用し、電車を作りたいから段ボールをくださいと園長に伝えに来る。保護者からその絵本の内容を共有してもらい。担任から子どもの望みをクラス伝え、段ボール集めが始まる。集めて段ボールを並べ、どうしたら自分たちイメージするものが作れるのか模索中である。



## 5. 振り返り

**取り組み前の姿：**子どもたちのトラブルが起きるたびに、ルールの確認や貸し借りをすることを教えがちだった。ブロックの数や種類が少なくとも仕方ないとあきらめがちだった。子どもたちの姿を園内で共有する中で、遊びこめるだけの数が足りない。パーツを選びやすい入れ物はどんなものか。同じブロックに集まりがちである等々様々な意見が出た。その遊びが好きなか選択肢が少ないからなのか、どちらも考え、ブロックの数自体を増やし、他のブロックも購入する。

⇒ブロックの数を増やすことで子どもたちの遊ぶ時間が長くなり、トラブルがある程度減る。それぞれが作りたいものを作れるようになっていく。また種類を増やすことで今までブロック類で遊ばなかった子が遊び出す。製作では材料が豊富になることで子どもたちの遊びの持続時間が伸びたり、複数日にわたって作り続けるようになる。遊びを観察し続けることで子どもからのやりたいことへの欲求が出るようになる。保育士が考える活動から子どもたちの自主的発想が生まれ始めた。

**気づき：**子どもたちは遊べないのではなく、作れないのではなく、その機会を豊富に持つ。そのため素材が数、種類共に豊富に用意する必要がある。小さいクラスでも大きいクラスでもその活動の様子に応じて保育士の言葉かけや環境設定が継続、発展の糸口になることを学んだ。子どものイメージを言葉かけにより具体化したり、友だちとの協同につなげる。他の子の作ってみようと刺激ともなった。

**今後の展望：**現在の姿としてまだまだ遊びの発展性という点ではかなり幼い。遊び混む時間、とって置くスペースが小さすぎる。いつまで置いておき、どの時点で戻すのか。決め手はあいまいになる部分があり、検討を重ねる必要がある。展示についても一時置き程度からなかなか脱却できなかった。今後は子どもが作ったものを写真に撮り、製作物をクラスの枠を超えて見られる機会を設けるなど園全体で横断的な取り組みへとつなげられた時に異年齢での関り、刺激の場になるのではないかと考えている。保育室がパーテーションの移動により異年齢での関りを持ちやすい作りを活かし、活動を継続していきたい。